二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版

恋にて候！

風雲戦姫伝

小説 庵乃音人
挿絵 かん奈

プロローグ　運命の恋が始まる　006
第一章　イケイケ巫女娘に犯されちゃった！　015
第二章　怪盗くノ一の淫戯　060
第三章　クールな女武者、悶絶す　113
第四章　さよなら、姫さま　144
第五章　龍の王と炎の戦姫たち　195
エピローグ　新たな戦いの日々へ　243

登場人物紹介

Characters

ゆな姫

龍丸の女主人で涼風国(すずかぜがこく)の姫君。同盟関係と引き替えに隣の峰剣国(みねつるぎのくに)に人質として取られました。わがままですぐ怒るおてんばお嬢様。

蔵野(くらの)あずさ

峰剣国の重臣。クールで無口、ストイックな性格の女武芸者。

瀬名多(せなだ)

峰剣国の守護神社を治める若き巫女。不思議な力を生まれながらにして持っています。

葛葉(くずは)

峰剣国の富裕層を専門に狙う女盗賊。もとは本職の忍者。

龍丸(りゅうまる)

ゆな姫のお小姓。武芸全般に通じていますが、気の弱いところがあるショタ少年です。

「あぁ、瀬名多……ぐああ、それ、あっあっ……ああっ……」
龍丸は武士に似合わぬ情けない呻き声をあげた。さっき出会ったばかりの娘の口の中で果てたという事実だけでも、犬畜生にも劣る外道な行為のはずなのに、今度はその娘と一つに繋がろうとしているのだ。こともあろうに、ゆな姫がすぐそこにいるというのに。
（あぁぁ、姫様⁉　僕……あぁ、僕ぅ⁉）
強烈な背徳感が少年の劣情をさらに煽った。生まれて初めて感じる、空恐ろしいまでの快美感に慄然となった龍丸は、もう瀬名多の身体を押しのけることさえできない。
入口を擦り合わせただけでもこんなに気持ちいいのだ。肉壺のもっと奥深くまで挿入したら、いったいどうなってしまうのだろう――――龍丸は焦げつくような淫欲とともに、陶然としながら夢想した。
入れたい。瀬名多と一つになりたい。欲望は、もう抑えようがなかった。
「んふうぅ、あぁ、龍丸様……お慕い申しておりますわん♪　あああぁ‼」
亀頭が揉み潰されるように変形し、にゅるんと、窮屈な肉の重なりの中に飛び込む。
龍丸は大声をあげそうになった。熱い肉の塊が、全方向から鈴口を締めつけてくる。
（う、嘘だろう⁉　何これ……あ、あぁ、気持ちよすぎる‼）
目を見開き、口までをもあんぐりと開く。股間から酸味の混じった苛烈な快感が爆ぜた。
「あぁぁ、龍丸様ぁ……あっはあああっ！」

「うおっ⁉　うおっおっおおっ⁉」

わずかに感じた圧迫感の後、突然、遮るものがなくなったような感覚が走った。

気がつけば、彼の陰茎はズブズブと、狭い肉の重なりの中を奥へ奥へと埋まっている。

龍丸は呻き、瀬名多の下で身体をのたうたせた。

彼女の腹の底に、見る見る怒張が呑み込まれていく。肉傘の縁とぬめる膣壁の凹凸が擦れ合い、ここは極楽浄土かと思えるような壮絶な気持ちよさが肉茎から全身に広がった。

それは、知ってはならない快感だった。そして知ってしまった以上、もう二度と後戻りはできない。そんな禁断の桃源郷に、今、龍丸はいた。

「ううっ、龍丸様ぁ……あぁ、痛い……くふぅっ……」

だが、その瀬名多の一言で、龍丸は我に返る。改めて見ると、自分の勃起を根元まで咥え込んだ巫女娘の秘唇からは、真っ赤な鮮血が溢れ出していた。

「瀬名多⁉」と少年は娘の名を呼ぶ。生娘が初めて男を受け入れた時の痛みがどういうものなのかさっぱり分からなかったが、何しろ出血しているのである。

「平気……♪　ちょっと痛かっただけですぅ。あぁ、嬉しい……龍丸様と……一つになれましたわん♪」

興奮のため、色白の美貌は湯上がりのように火照っていた。

瀬名多は恥ずかしそうに微笑むと、龍丸の熱塊を腹の底に食い締め、四つん這いになっ

たまま上下に腰を踊らせ始めた。
「ぐわっ⁉　あぁ、瀬名多。んあっあっあぁ！」
龍丸は慌てて肛門を窄め、陰茎の根元を搾るような動きをした。そうでもしないと、あっという間に果ててしまいそうだったのだ。巫女乙女の肉壺は熱いぬめりに溢れている。このぬめりは、破瓜の鮮血によるものなのか。
「あぁ、せ、瀬名多⁉　ぬるぬるして……んあっあっ、何これ、あぁぁっ‼」
何か言おうとしても言葉にならない。
肉棹と擦れ合う蜜洞は、想像を絶する気持ちよさである。
とろけきった膣襞の微細な凹凸がカリ首の出っ張りと擦れ合い、背筋をゾクゾクと愉悦の電撃が駆け上がる。尺八も気持ちよかったが、これはその比ではない。
「いヤン、龍丸様♪　あン、興奮して、いやらしい汁が溢れ出してしまいましたのぉ♪」
艶めかしい喘ぎ声を漏らし、豊臀を上下にくねらせながら、瀬名多は告白した。とすると、この心地よさはやはり出血のせいばかりではなかったのだと龍丸は得心する。興奮すると女は濡れるというが、それはこれほどまでに、男も気持ちよくさせるものだったのだ。
「ぐっ、うぐうぅ……んぐぅわぁ、おっ……おおっ……」
龍丸は歯を食いしばり、思いきり肛門を締め続けた。少しでも気を抜くと、すぐにでも射精してしまいそうだ。いやしくも誇り高き武士として、そんな粗相は許されないという

思いが少々。だが、彼が放出の時を少しでも引き延ばそうとしているのは、この異様な快感を、もっともっと味わい続けていたかったというのが偽らざる本音だった。

（気持ちいい！　気持ちいい‼　あぁ、気が触れてしまいそうだぁ……‼）

股間から沸き上がるアヘンのような恍惚感に身も心も妖しく痺れさせながら、龍丸は年端もいかない小娘みたいに、かぶりを振ってのたうつ。

今まで感じたこともないような獰猛な肉悦が、全身を強烈に呪縛した。

四つん這いになって彼の胸板に両手をついた瀬名多の、可愛い顔と胸がすぐそこにある。少年は叫び出したくなるほどの興奮に駆られ、小袖の胸の合わせ目を掴むと、荒々しく左右に掻き開いた。

「やぁあん♪　あぁ、ケモノのようですぅ！」

瀬名多は歓喜と羞恥が入り交じった悲鳴をあげ、弓のように背中をたわめた。

ぷるるんっと揺れ弾みながら露わになったのは、色白のたわわな巨乳である。

生まれて初めて間近で目にする、美しい乙女の生乳房だった。つんと勃起した、桜色の乳首の眺めがたまらない。乳輪も乳首と同じ、淡く儚げな色をしていた。下向きになっているため乳房はだらりと垂れ下がり、湿った音を立てて左右の肉実を打ちつけ合う。

（で、でかい！　あぁ、おっぱい……女の子の、おっぱい……‼）

龍丸は両手を伸ばし、たぷたぷと揺れ弾む豊満な乳肉をわっしと掴んだ。いまだかつて、

こんなに柔らかなものに触れたことは一度だってなかったと、彼は思う。
「んわぁあ……柔らかい。おっぱいって、こんなに柔らかいものだったんだ……」
手の中で今にもとろけてしまいそうな乳肉の感触に陶然としつつ、少年は十本の指に徐々に力を入れた。双子の乳房が、根元からくびり出されるように乳肌を突っぱらせ、卑猥にひしゃげてフルフルと震える。
「あぁぁ、龍丸様ぁ。揉んで。どうぞ揉んで下さいましぃ。瀬名多の乳を。乳をぉ！」
艶めかしく腰を動かして彼の男根に肉壺の淫襞を擦りつけながら、瀬名多は色っぽい声で懇願した。乞われるまでもない。目の前で変形する乳肉の扇情的な形に肉悦が増した龍丸は、両手の指を開閉させて二つの乳房を揉みしだいた。
白い乳肌に指が食い込み、突っぱった乳肉が指と指の間からダイナミックに飛び出す。乳を揉むたびに、硬く痼りきった乳首があちらへこちらへと向きを変え、虚空にジグザグの線を描く様も猥褻だった。瀬名多は鎖骨を艶やかに浮き上がらせ、乳を揉まれる悦びに悩ましげな淫声をあげる。
「はうぅ、龍丸様ぁ。もっと。もっと揉んでぇ♪　あぁ、お乳、感じちゃうぅ！」
伸びをする猫のように両手を突っぱらせ、細いおとがいを天に向かって突き上げた。牡の加虐心を妖しく刺激する色っぽい声が上ずりながら、長い尾を引く。
龍丸はそんな巫女少女の激しい反応に気をよくする。さらに興奮を募らせると、ぴょこ

『第三章　クールな女武者、悶絶す』より

（うわっ！　な、何これ……あぁ、き、気持ちよすぎる！）

今にも射精してしまいそうになり、慌てて肛門括約筋を窄める。あずさの肉壺は破瓜の鮮血と愛蜜をたっぷりとたたえていやらしく蠕動し、ただそれだけでも相当な気持ちよさだった。しかもその上、獣棒を抜き差しするたびに、亀頭天部が数の子天井に擦られる。熱湯が煮沸するような快美感が脳天にまで炸裂し、いやでも射精衝動を刺激した。

しかも、龍丸の陰茎とぴったり密着した葛葉の怒張が、加虐的とも言える荒々しさで、女武者の膣の中を出たり入ったりしているのだ。プニプニした亀頭が責め嬲るのは、あずさの膣襞ばかりではない。それは龍丸の亀頭や裏筋も擦り、猛る肉幹にもえぐるように食い込んで、彼の恍惚神経をこれでもかとばかりに責め立てた。

「ああ、二本……二本が別々に……マ〇コの中で暴れてる！　ああ、感じるぅ!!」

淫羊角のせいで理性を崩壊させた孤高の女武士は、彼女にあるまじき卑語を口走り、葛葉の身体の上で淫蛇のように身をくねらせる。とにかくすごい発汗量だった。天然の汗ローションがほどよく引き締まった乙女武士の肉体を艶めかしくぬめ光らせ、目でも龍丸を興奮させる。汗は、今この瞬間も、次々とあずさの肉体から噴き出していた。

「はぁはぁ。すごい汗だな、あずさ。ああ、チチもこんなにぬるぬるして……」

興奮した声で、葛葉が呻く。巨大な乳房を揉むくノ一の指は女武者の汗で濡れ、彼女が手を放すと無数の粘糸がにちゃっと卑猥な音を立てて粘り伸びた。

硬く痼りきった二つの乳首も粘つく汗で濡れ光っている。愛くるしい乳芽は、汗に濡れて少し濃い桜色になっていた。葛葉が指を開閉させて乳肉を揉むたびにフルフルと震え、あっちを向いたりこっちを向いたりする眺めがいやらしい。

女忍者は背後から首を伸ばし、姫武者の爆乳の先端部を舌で舐め始めた。まん丸に痼った桜色の乳芽が、たちまち女忍者の唾液まみれになる。

「ひいぃ！　あぁ、葛葉……あっあっ、それイイッ！　ふひいぃ!!」

「くくくッ……感じるか。はぁはぁ……れろれろ、ぴちゃれろ……」

発汗しているのはあずさばかりではなかった。龍丸もそうだったが、見れば葛葉の肉体からも、玉のような汗が噴き出している。こちらもまさに、天然ローションを全身に塗りたくったような猥褻な眺め。あずさの肉体と葛葉の肉体が擦れ合うたび、にちゃにちゃぴちゃぴちゃと淫靡な粘着音が響き、二人の身体から白い湯気がほんわかと上がった。

（あぁ、何ていやらしい……それにしても、この気持ちよさ……あぁ、もうだめだぁ！）

心の中で情けない悲鳴をあげ、龍丸はとろけるような快感にどっぷりと溺れた。

入れても出しても、ザラザラした数の子天井と、乙女の亀頭冠に陰茎を揉みくちゃにされ、信じられないほどの気持ちよさだ。どろりと濃密な我慢汁が尿口から溢れ、あずさの内壁に付着する。自分が漏らした下品な汁を微細な肉粒の隆起にすり込むように亀頭を動かし、数の子天井をしごきにしごいた。龍丸と葛葉のいやらしい責めに応えるように、白

濁した牝汁が女武者の肉穴から溢れ出す。粘る愛液は葛葉の陰茎を伝い流れ、蜂蜜のようにとろけながら、くノ一の膣園に垂れ流れていく。

「んはあぁ！　気持ちいい……気持ちいい！　二本のチンポで擦られて、オマ〇コじんじん感じちゃう！　あぁ、すごい！　龍丸殿ぉ！　葛葉……葛葉ああっ!!」

「おおっ、あずさ……あずさっ！」

興奮の頂点に向かおうとするあずさに煽られ、葛葉はさらにカクカクと腰を振り、ぬらつく発情淫肉の中で怒張を抜き差しした。

「ぐはっ！　ぐあぁぁっ!?」

彼女のその動きは、龍丸をもいっそう熱くさせずにはおかない。二つの亀頭が互いにひしゃげながら擦れ合う。葛葉の鈴口からどろっと先走り汁が溢れ、自分の肉亀を濡らすのを、龍丸は感じた。二人はそれぞれ、あずさの狭い肉穴をめいっぱい広げて怒張を抜き差しし、彼女に狂気のような喜悦を与えつつ、互いの男根をグチャグチャと戯れ合わせる。

「ぐあぁっ、く、葛葉……葛葉ぁ……」

「こ、小僧ぅ……はぁはぁ……あぁ、龍丸ぅ！」

龍丸は不思議でならなかった。やはり間違いない。どうしてか自分は、憎むべき相手であるはずのこの女忍者にまで、あずさや瀬名多に感じるのとよく似た恋情を覚えてしまっている。この残虐でサディスティックなくノ一が、愛おしく感じられてならないのだ。

妖しく潤む葛葉の瞳にも、自分が感じているのとよく似た感情が見え隠れしているように思えるのは気のせいだろうか。

（あぁ、いったいどうしちまったんだ、俺って奴は）

困惑しながらも、自分の気持ちに嘘はつけなかった。龍丸は心の中で何とも言えない甘酸っぱさを感じつつ、葛葉と動きを合わせて女武者の蜜壺を陰茎で掻き毟る。攪拌された愛液が、肉傘に掻き出されるように牝穴から溢れ出した。

二人の肉棒は、ところどころに白濁した粘液の筋をつけながら、狂ったような抽送を繰り返した。鼓膜を心地よく痺れさせるのは、ヌチャヌチャと響く卑猥な愛液の攪拌音だ。数の子天井の微細な粒々の刺激がたまらない。擦れ合う葛葉の亀頭の、プニプニした柔らかさがたまらない。魂までもが揮発してしまいそうな淫らな高揚感の中で、龍丸はただひたすら腰を振り、あずさの膣肉と葛葉の陰茎に肉棒を擦りつける。

「ひいぃ！　あぁ、気持ちいい！　龍丸殿……葛葉！　もっと……もっとオマ〇コ掻き回して！　おっぱいも、き、気持ちいいぃ!!　揉んで！　もっと吸って！　ああぁっ!!」

悶絶寸前の荒々しさで、あずさが髪を振り乱し、黄色い金切り声を張り上げた。

我を忘れて龍丸と葛葉に甘える、娘らしい仕草が可愛くて可愛くてならない。

「あずさ殿ぉ！　もうだめだ。俺……俺……あぁ、射精するぅ!!」

最後の瞬間が一気に近づいてきたことを自覚しつつ、少年は引きつった声で叫んだ。

「おぉ、私ももうダメだ！　あずさ！　龍丸ぅ！　あああ、射精する!!」
全身ドロドロと汗まみれになった葛葉も、熱した吐息とともに引きつった声をあげる。
「射精して！　中に！　私の中に出していいから!!　気持ちいい！　あああ、おかしくなっちゃう！　ああっ！　あああっ!!」
ぬるぬると汗に濡れた三つの身体が団子のように重なり、粘つく糸を無数に伸ばしながら、激しく蠢いた。目の裏で白い光が瞬く。甘酸っぱい恍惚感が広がり、肛門がヒクンと疼いて、脊髄の芯が熾火のように赤く焼けた。
「だめだ！　イクイクイクイクぅ！　あずさ殿、葛葉！　あああああっ!!」
少年は狂ったように喚きながら猛然と腰を振った。
「気持ちいい！　気持ちいい！　ああぁ！　ああああっ!!」
「私ももうダメだああっ！　射精しちゃう！　きゃああーーーーーっ!!」
ビクンッ！　ビクビクビクンンッ!!
「ああああああっ!!」
悲鳴にも似た三人の叫び声が、蔵の中に響いた――――!!
どぴゅっ！　ぶるびぢゅぶぢゅりゅ!!　どぴゅるぶぢゅぶぢゅどぴぴぴ!!
龍丸はあずさの膣奥深く男根を埋めると、痙攣のように陰茎を脈打たせ、濃密な白濁粘液を肉穴の中にとぷとぷと注ぎ込む。同時に、葛葉も射精していた。せわしなく膨張と収

『第五章　龍の王と炎の戦姫たち』より

涼風国、峰剣国、呪覇暗国の三国は、涼風国が平定・統一した。多喪野の悪政に苦しんだ峰剣国の人々は、『龍王国』という新たな名のもとに始められた新たな国で、龍丸とゆな姫による、民の暮らしを第一とした治世のもと、平和な暮らしを満喫していた。

そして、当の新領主、龍丸が今日も今日とて、何をしていたかといえば――。

「はぁはぁ……あ、あぁ、姫様……あぁ、それ……気持ちよすぎます……むうっ……」

快感にとろけきった龍丸の声が、抜けるような青空に向かって聳え立つ天守閣最上階の一角に響いていた。城下の町や田畑はもちろん、その向こうに広がる山々や大海原まで見渡せる眺望抜群のそこは、露天風呂である。風呂好きとして知られた前城主・多喪野大膳がわざわざ天守閣に作らせた、広々とした檜の風呂。湯舟はもちろん、洗い場までもが総檜造りで、ゆったりとお湯に浸かりながら、風光明媚な景色を満喫することができる。

しかもお湯は、近くから湧き出る天然の温泉をそのまま使用していた。

もっとも、今その湯舟に浸かる全裸の龍丸に、眼下の景色を眺める余裕はない。湯舟の縁に腰かけた彼の前には、肌襦袢一枚の姿でお湯に入ったゆな姫が膝立ちで座り、たわわに実った双子の乳房に彼の怒張を挟んで、しこしこと上下にしごいていたのである。

「龍丸……はぁはぁ……何度言ったら分かるのじゃ……はぁはぁはぁ……」

淫らな行為とお湯の熱さのせいで、勝ち気な美貌をホオズキ色に紅潮させた半裸の姫は、パイズリの責めを続けながら、上目づかいに龍丸を見つめた。

「我らはもう夫婦（めおと）じゃ。お前はわらわの夫……なぜ『ゆな』と呼ばぬ」
言いながら、両手で左右からせり上げた量感たっぷりの乳肉で、なおも少年の怒張を擦り立てた。深い胸の谷間を、姫の汗が温泉の湯とともに雫になって伝う。乳房が上へ下へと弾むたびに、風呂の中のお湯がちゃぷちゃぷと踊り、次から次へと飛沫が跳ねた。
龍丸は腑抜けのように表情を弛緩させ、陰茎から脊髄を通過して脳天にまで駆け上がる、天にも昇る恍惚感にうっとりと酔い痴れる。
「だ、だって姫様……姫様はやっぱり……姫様です……ああ、それいい……んがぁ……」
天を仰ぎ、首筋を引きつらせて喜悦の声をあげた。それほどに、ゆな姫の二つの乳房がもたらす刺激は快感だった。ただでさえすべすべした乳肌に、天然温泉の少しヌルヌルした感触が加わり、亀頭に擦りつけられる乳肉は筆舌に尽くしがたい心地よさである。
しかも乳肉はつきたての餅のように柔らかく、お湯と興奮のせいで、ほどよく温まっている。その上さらに、先端部の乳首は痼りに痼りきって桜色の肉実をまん丸に勃起させ、形のいい巨乳をさらに色っぽい状態に彩っていた。
感触も良し、目にも良し。愛する姫の唇からは切なげな吐息が「はぁはぁ」と零れ、耳でも龍丸を楽しませてくれる。これが天国でなくて、いったい何だというのか。
「あ、あぁ、姫様……おっぱいが、き、亀頭を擦って……うぅ、とろけちゃう……♪」
龍丸は城主にも似合わない情けない呻き声をあげてしまう。我に返り、風呂の中のゆな

姫を見ると、今度は姫がハッとして、慌てて彼から視線をそらした。
くりっとした大きな瞳の縁をいっそう紅潮させ、恥ずかしそうに唇を窄めてあらぬ方を向く。熱いのだろう、形のいい額には玉のように汗粒が浮かび、むちむちした肢体からは絶えず蒸気が沸き上がっていた。
「そ、そんなの……卑怯じゃ」
姫が呟く。少年が「はっ？」と聞き返すと、姫は瞳を潤ませ、顔を真っ赤にした。
「そんな可愛い顔されたら……わ、わらわはどうすればいいのじゃ。卑怯じゃ！」
姫は双子の乳塊の中から勢いよく飛び出してくる赤紫色の亀頭を見つめ、いきなりそれにむしゃぶりついた。
「うはっ、ひ、姫様⁉　あぁぁ、何を……ぐはあっ！」
「ぢゅぼぢゅぼ……ぢゅるぽぴちゃぢゅぼ！　ぢゅぽぢゅぽぢゅぽ！」
少年は、仰け反らずにはいられない。パイズリだけでも死ぬほどの気持ちよさなのに、今度はそこに、姫の尺八までもが加わったのである。
ヌルヌルと柔らかで窮屈な乳肉の狭間から解放されて勢いよく乳肉上部に飛び出すと、待ってましたとばかりに、今度は姫の小さな口が、猛る鈴口をちゅるりと咥え込む。
ぬめる口腔粘膜と跳ね踊る舌の刺激が亀頭を揉みくちゃにし、再びそれを解放する。亀頭が姫の唇から飛び出す刹那、朱色の唇と口のまわりの白い肉皮が、カリ首の形に内側か

ら盛り上がり、鼻の下の皮がいやらしく突っぱる眺めも、龍丸の淫悦を炙った。
姫の口を離れたどろどろの亀頭は、彼女の唇から伸びたいやらしい唾液の糸を引きながら、お湯に濡れたたわわな乳肉の中へ飛び込んでいく。
（ああ、姫様が僕のために、こんないやらしいことまで……）
感激だった。姫に愛されているという最高の喜びを、今さらのように実感する。
龍丸は日ごと夜ごと、姫とまぐわい、何度も彼女の膣の中で射精した。果てても果てても、いや、果てれば果てるほど姫への想いは募り、艶めかしい女体への渇望は増した。
姫は一度だって、そんな龍丸の求めを拒まなかった。近頃ではさらに積極的になり、自分から求めてくることさえ、たびたびある。今だって、湯の中にいきなり乱入してきたのは、ゆな姫の方だった。ものも言わずにもの狂おしい接吻を交わすと、自ら彼への奉仕を買って出て、肌襦袢一枚の淫らな姿で卑猥な行為を始めたのである。
ゆな姫のお腹は、ぷっくりと膨れていた。いわゆる『ボテ腹』である。龍丸の子を孕んですべらかな肉肌を突っぱらせた丸いお腹が、お湯の中でユサユサと揺れる。
「ぢゅぽぢゅぽぷぴぷぴ！　ああ、龍丸……チンチン、可愛い♪　ぢゅぽぢゅぽ……」
「んあぁ、姫様。だ、だめです、もう出ちゃう！　射精してしまいまする！」
一気に射精衝動が膨張してきた龍丸は、引きつった声を漏らして全身を硬直させた。甘酸っぱい疼きが陰茎に走り、それは同時に肛肉までをも痺れさせる。

「かまわぬ……ぢゅぽぢゅぽ……わ、わらわが受けとめてあげる……出すがよい♪」
姫は豊満で健康的な乳房と愛くるしい口で少年の男根を愛撫しながら、可愛いことを言ってさらに彼を喜ばせた。大好きな姫様の口の中に射精できると思った龍丸の興奮は増し、亀頭はさらに肥大する。陰嚢の中では精液が煮立てられて、二つの睾丸が跳ね踊った。
「姫様、あぁ、出ちゃう……もうダメにございまする……あぁ、姫！　姫ぇ!!」
姫の口唇と肉棒が擦れ合って響く、ぢゅぽぢゅぽという艶めかしい唾液音が高まった。乳肉の動きもいっそう激しくなり、姫の深い胸の谷間からお湯の飛沫が勢いよく飛ぶ。
「あぁ、出して……出して、龍丸♪　わらわが飲んであげる……全部……全部！」
少年の怒張から活きのいい子種を根こそぎ搾り取ろうとでもするように、姫の乳肉と口、舌の責めが激しさを増した。龍丸は目の裏で白い光が瞬くのを感じながら、腰かけた湯舟の縁を両手で掴む。姫は首を前後に動かして勢いをつけ、口の中のさらに深い部分まで、彼の陰茎が飛び込んでくるようにして、猛然と勃起を責め立てる。
「ぢゅぽぢゅぽぢゅぽ！　ぷぴぢゅるんぽぽっ！　んぢゅぷぢゅぽぢゅぽぢゅぽ!!」
「だ、だめだ……あぁ、出ちゃう！　出ちゃう、出ちゃう、出ちゃう！　あぁぁっ!!」
「むんんぅぅっ!?」
全身を小刻みに痙攣させた龍丸は、己の股ぐらから熱いものが噴き出すのを感じた。ゆな姫の小さな口いっぱいに埋まった陰茎は禍々しいほど豪快に脈打ち、愛する女人の

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 『ミルフィーユ』ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!